

30amE-189

過去 50 年間のわが国の高等植物による食中毒事例の傾向について

○登田 美桜¹, 畝山 智香子¹, 春日 文子¹(¹国立衛研)

【目的】高等植物による食中毒発生リスクを効率的に低減させるためには、過去の発生状況及びリスク因子等にもとづいた重点的なリスク管理が必要である。本研究では、過去 50 年間のわが国における高等植物による食中毒事例の傾向を分析した。特に、過去の発生件数の累計が多く、最近 10 年間に増加傾向が見られる高等植物に着目した。【方法】厚労省監修の全国食中毒事件録（昭和 36 年～平成 22 年版）に記載された高等植物による食中毒事例を調査対象にした。原因食品の詳細（高等植物の種類等）が全国食中毒事件録に記載されていない事例については、学術雑誌、各都道府県の公式ウェブサイト及び衛生研究所等の年報を参考資料として使用した。【結果及び考察】わが国における高等植物による食中毒の発生件数は、平成 7 年頃から増加している傾向が見られた。食中毒の発生件数は新芽が出る 4、5 月に多いものの、この時期に限らず年中発生していた。死亡事例では、トリカブト類を原因とする事例が多く、近年特徴的だったのはイヌサフラン及びグロリオサ等の園芸植物を原因とする発生であった。原因施設の 7 割以上は「家庭」であり、その多くは患者が自ら原因植物を採取していた。次いで多かったのは「学校」であった。過去 50 年間の食中毒発生件数の累計は、チョウセンアサガオ類、バイケイソウ類及びトリカブト類で多く、これら 3 種については特に注意喚起が必要であると考えられた。最近 10 年間に顕著な増加が見られたのは、バイケイソウ類、スイセン、ジャガイモ及びクワズイモであった。特に、食中毒が大規模化しやすい「学校」において、授業の一環として採取・調理されたジャガイモによる食中毒の発生が増加していることから、教育担当者の自然毒の危険性に関する認識の低下が懸念され、教育現場での予防対策が必要であると考えられた。